

## 令和5（2023）年度 第2学期始業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

久々に感染対策による行動制限のない夏休みでした。特別に暑い夏になりましたが、皆さんはどのように過ごされたでしょうか。街には外国人観光客の姿が数多く見られましたし、大規模なスポーツ大会や音楽フェス、夏祭りや花火大会などが、入場者数や声出しなどの制限が設けられることなく開催され、いずれも大変な盛り上がりを見せていました。そういった状況を見て、コロナ禍において我々が感じていたストレスが、いかに大きなものであったかを改めて思い知らされました。そして、世界に活気が蘇ってきていることを、掛け値なしに嬉しく感じました。しかし一方では、感染状況が第9波を迎えているとの指摘があり、地域によっては医療体制がかなり厳しい状況になっていたようです。本校においても、夏休み期間を通じて、コロナに罹患したとの連絡が途切れずに入る状態でありました。幸いなことに感染者が爆発的に増加することはありませんでしたが、やはり常に不安がつきまとう状態であったとは言えるでしょう。そのような不安を感じながらも、中1、中2の林間学校や各クラブの夏合宿等がほぼ予定通りに行われ、特に大きな事故等の報告がなかったことには、ほっと胸をなでおろす思いでありました。私も、あるクラブの夏合宿の引率に加わったのですが、幹部生徒諸君が、感染対策の行動をごく自然に行っていると感じましたし、今年は熱中症予防にも特に気を遣わなければならなかったわけですが、そこもしっかり考えられているようでした。いくつかのクラブからは、合宿中に発熱者が出たという報告もあったのですが、ご家庭のご理解とご協力を得られたこともあり、いち早く対策を講じることができたので、感染が広がることはありませんでした。先日の終業式において私は、しっかり覚悟を決めて、コロナ禍により被った痛みを忘れずに、また、痛みを被った人々を疎外するような状況を作らないように、着実に歩みを進めていかねばならないと思うと述べましたが、これを一人ひとりの生徒諸君が自分ごととしてしっかり意識していたがゆえに、予定していた活動をつつがなく実施することができたのだと思いますし、そこから学ぶことは非常に大きかったと思うのです。2週間後には文化祭が控えているわけですが、4年ぶりに入場制限を設けずに実施するにあたり、この夏休みの成果を互いにしっかりと意識しつつ行動したいところです。諸君の健闘を期待しています。

話題は変わりますが、この夏に封切られた、宮崎駿監督の最新作アニメ映画『君たちはどう生きるか』を見て、大いに感じるどころがありました。宮崎監督と言えば、前作『風立ちぬ』の発表後に引退を宣言して以来10年間の沈黙を破っての復帰となったわけで、それだけに注目を集めることとなりました。前作が封切られた際に、テレビの特集番組でその制作の様子が取り上げられ、それを見た私は一気に宮崎ファンになりました。宮崎監督に私が惹かれたのは、監督が企画会議の場や制作現場において繰り返し口にしていた言葉によります。その言葉とは、「あー、面倒くさい」というものでした。密着取材の様子をまとめたその番組中、宮崎監督は何度も何度も「面倒くさい」を漏らしていました。それは腹の底から出てきている言葉であり、とても実感のこもったものに聞こえました。一つの場面を作り上げるに当たっては、実に多様で細かな事柄について一つひとつ検討し、作りこんでいく必要が生じるわけで、「面倒くさい」という感慨は、何一つとってもぞんざいにしないという姿勢があるからこそ、口をついて出てくるのではないかと思います。そして、その仕事に使命感と情熱をもって臨むがゆえに、ほんの些細な妥協も許せないのでしょうか。その仕事が好きであれば、「面倒くさい」などと感じることなく、はじめから最後まで喜び勇んで事に当たるだろう、それだけに楽に仕事ができるのではないかと考えられがちですが、実際はそうではなく、まるで制作者本人の意識をも超えたところまでの仕事を求められているという感覚を抱くのではないかと思います。そんな感覚で取り組む仕事は、いい加減なところでやめることが許されないのですから、実に苦しく「面倒くさい」ものなのではないかと思えます。はたして、この度の最新作も、相当に「面倒くさい」作業を重ねたのではないかとと思われるものでした。人物の表情や所作の作り方ひとつをとっても非常に細かなところまで作りこまれていると感じましたし、間の取り方や場面の構成なども、考え抜かれたものであるように思いました。もちろんこの感想は、作品を実際に見てから時間を置いた今だから出てくるものであって、見ているその時の私は、ただただその世界に引き込まれていたのです。すべての場面において考え抜かれたものだからこそ、見る者の心を捉えるのでしょうか。そして、この映画が話題になっているもう一つの理由が、事前の宣伝を全く行わなかったこと、封切されてからも監督自らが自作について語る様子がメディアに登場しないということが挙げられます。すべては作品そのものに委ねるという意志が鮮明に感じられます。そこ

で、その作品のタイトルが、『君たちはどう生きるか』であることは、実に深い意味を持っていると思われてきます。このタイトルは、1937年に出版された同名の児童向け小説に倣ったものであると思われませんが、その内容は全く違うものです。なぜこのタイトルにしたのかについてヒントを得たいと思い、この度改めて小説作品を読みました。物語は、中学生の主人公「コペル君」が、少年期から青年期への多感な季節を過ごす中での葛藤を、実に細かな心理描写で描き出したものです。そして、読者に向かって「最後に、みなさんにおたずねしたいと思います。——／君たちは、どう生きるか。」と問いかけて、長い作品を閉じています。この、最後の問いかけの含意については、後になって著者の吉野源三郎の全集が編まれる際に、本人が書いたあとがきによってうかがい知ることができます。この作品は、元々、1935年から2年にわたって刊行された『日本少国民文庫』全16巻の最後の配本にあたるものでした。『日本少国民文庫』は作家の山本有三が中心となり刊行されたもので、その狙いは、満州事変以来の軍国主義が勃興する時代にあって、次代を担う子供たちに対して、自由で豊かな文化のあることを伝えたいというものであったといえます。作品では、主人公が、図らずも大切な友人を裏切ることになってしまい、強い自己嫌悪の中で苦しい涙に連れながら、どうすれば友情を取り戻すことができるか思い悩むさまが、克明に記されます。父を早くに亡くした主人公を、良きアドバイザーとして支える叔父の言葉が印象的です。すなわち、「自分の過ちを認めることはつらい。しかし過ちをつらく感じるといことの中に、人間の立派さもあるんだ。正しい道義に従って行動する能力を備えたものでなければ、自分の過ちを思って、つらい涙を流しはしないのだ。」という、主人公に宛てたメッセージです。この作品は、軍国主義に染まっていく時代にあって、それを正面から強く批判してみせるのではなく、子どもたちに内心を省みることを通して一人ひとりの魂の解放を実感させようと試みたものであり、表面的な立派さを強要される時代に生きる子どもたち一人ひとりを、鼓舞するものであったと感じます。このことをふまえて宮崎駿監督による同名のアニメ映画を考えると、思わずどきどきしてしまいます。確かに、ウクライナで長引いている戦争のこと、それをもとに交わされる核軍備についての議論、防衛強化を訴える声高な主張などを思うと、現代は、吉野源三郎が小説『君たちはどう生きるか』を世に示した時代と似ているのかもしれないと思ってしまうのです。映画『君たちはどう生きるか』においても、主人公「真人」は、自分を傷つけ、逡巡し、葛藤します。宮崎監督は、あくまでもその作品を通して、次代を担う者たちに「君たちは、どう生きるか」と問うているのかもしれない。

この休み中には、78回目の原爆の日、終戦の日を迎えました。先の戦争を知る人はいよいよ減少し、代わって若い人々が語り部を受け継ごうという動きが、具体的に報じられることが多くなったと感じています。「君たちは、どう生きるか」という問いに対して、正面から誠実に向き合っていきたいものです。

最後に、高校3年生諸君へ、毎年申し上げているメッセージを届けたいと思います。

この夏休みの成果はいかがでしたか。高い目標を見据えて頑張っている諸君は、長い夏休みを前にしてやるべきことをあれこれと思い描いていたことと思います。自らに課した課題はどの程度消化できましたか。うまくこなすことができた実感している諸君はそれを自信にしてよいと思うのですが、うまくいかずに焦りを募らせている諸君も少なくないと思います。そんな諸君に申しあげたい。元来学ぶことにはゴールがなく、学んで先行きが拓ける分、学ぶべきことも増えていくとを感じるものです。つまり、理想の進度とのギャップを感じて焦っているということは、目標に向かって努力を重ねていることの証左なのです。皆さんの駒東生活はこれからが佳境です。受験勉強に無味乾燥な印象が伴うことは否定できませんが、実際は、中身の濃い、充実した期間になっていきます。これまで様々な場面で切磋琢磨してきた学友たちとともに、自信をもって、思う存分伸び伸びと学んでほしいと思います。

以上をもって、式辞といたします。

令和5(2023)年 9月1日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦